

聖書:ルカの福音書5章17~26節

説教:友よ、あなたの罪は赦された

はじめに

前はシモン・ペテロとツアラアトに冒された人のことを見てきました。この二人はいつけん何の関係もなさそうでしたが、よく見ると、汚れと罪を自覚したときにきよい方であるイエスに触れていただき、人生が大きく変えられていった。そのような共通点がありました。

このようなことが次々と起きていくのですから、やがてイエスの評判は国中にひろまり、パリサイ人、律法学者たちの耳にも入ります。彼らは早速イエスのもとに調査団を派遣し、ユダヤ教の教義に反することをしていないか調べはじめます。これが今日の箇所背景になっています。

1 ここで起きたこと

1) 何をしてもいいのか?

ここを読んで驚かない人はいないでしょう。屋上に上って人の家の瓦を勝手にはがし、そこから寝床をイエスの前につり降ろした人たちのことが書かれています。いくら二千年前のこととはいえ、こんなことをやっていいのか。家の中には大ぜいの人がいます。一歩間違ったら大きな事故になるでしょう。イエスは、事故が起きないように当然ならんらかの指導をすべきではないのか。

ところがイエスは止めません。それどころか、「彼らの信仰を見て、『友よ、あなたの罪は赦された』」と言われる。かえって男たちがしたことを称賛しているように見えます。どんなに信仰はすばらしくても、世の中にはやっていいことといけなことがあるはずです。それとも、信仰から出たことなら、たとえ他人を危険な目に遭わせてもやってよいというのか。それがりっぱな信仰だということでしょうか。もちろんそんなはずはありません。イエスが何を語ろうとしているのか、正しく理解するためには視点を変える必要があります。

2) 「彼らの信仰」を見て

屋根の上から降ろされた中風の人に向けてイエスが、「友よ、あなたの罪は赦された」と言われたことを発端にして、大きな論争が巻き起こっていくのですが、イエスがこのように言われた理由として「彼らの信仰を見て」と書かれていることに注目します。

「彼ら」とは、中風の人を連れて来た人たちのことを指すことは明かです。おそらく家族か隣近所の人たちだったのでしょう。そんな「彼らの信仰」をイエスを見た。いったい何を見たのでしょうか。彼らのしたことと言えば、無理矢理瓦をはいで、病人をつり降ろしたことです。このことのどこが信仰なのでしょう。やっぱり、これくらいの無茶苦茶ことをしないと、イエスに認めてもらえないということか。この疑問については、また後で触れることにして、その前にこの場面のもういっぽうの主役であるパリサイ人たちのことを見ていきます。

2 イエスとパリサイ人

1) パリサイ人たちの非難

イエスの一挙手一投足を監視しているパリサイ人と律法学者たちの目の前でイエスが、「友よ、あなたの罪は赦された」と言ったことに対する彼らの反応は21節後半にあります。「神への冒瀆を口にするこの人は、いったい何者だ。神おひとりのほかに、だれが罪を赦すことができるだろうか。」

彼らが言っていることは、あながち間違っていたわけではありません。旧約聖書には、神だけが罪を赦す権威を持つておることが書かれていますから、ある意味では正しかった。

2) どちらが易しいか

ではなにが問題だったのか。そのことはこの後じょじょに明らかになります。イエスは彼らの非難に対しこう答えています。23節。「『あなたの罪は赦された』と言うのと、『起きて歩け』と言うのと、どちらが易しいか。」

イエスはどちらが易しいのかと問いかけて、あなたがたの頭で考えろと言っています。さて、どちらが易しいのでしょうか。皆さんならどう考えるでしょうか。もし私が「起きて歩け」と言ったとしても何も起きませんから、私にとって「起きて歩け」と語ることは私にとってたいへん難しい。しかし「あなたの罪は赦された」と私が言っても、その結果は誰も目で確認できませんから、誰に対しても言える。ですから易しいことになる。

3) イエスにとって

ではイエスにとってはどうなのか。イエスは神ですから、なんでもおできになります。難しいとか易しいということはなく、どちらも同じなのか。

このように考えてみたらどうでしょう。イエスが中風の人に「あなたの罪は赦された」と言われたとき、ではその罪はどこに行ったのでしょうか。消しゴムで消すように消えてなくなったのでしょうか。あるいは水に流すようにしてなくなったのか。そんなことはありません。私は時々言うのですが、この世界にはいろいろな法則があるように、罪にも「罪保存の法則」というものがある。罪が赦されたと言われたのなら、中風の人の罪が消えたのではなく、ちゃんと保存されていて、ほかのどこかに移ったことになる。どこに移ったのか。わかりですね。イエスが引き受けました。

聖書に書かれていないのに、どうしてそんなことが分かるのか。イエスはどこに向かわれましたか。十字架です。なぜですか。罪がさばかれるためです。でもイエスは神の子ですから、罪はないはずです。ではその罪はどこからきたのか。ここからです。「あなたの罪は赦された」と宣言したとき、ご自分の罪として引き受けられた。それは易しいことなのでしょうか。十字架に向かうことになるのですから、易しいはずはない。いや、この方にとって最も難しいことでした。

イエスは「どちらが易しいか」と問いかけました。易しいのは、「起きて歩け」のほうだということに答えが出た。ではこれですべてなのか。まだ大事なことがあります。

4) 罪赦された結果として

イエスがなさることはすべてにおいて、非常に注意深く計画されています。イエスが語った順番に注目します。最初にまず20節で「友よ、あなたの罪は赦された」と言われ、そうしてから次に24節で「あなたに言う。起きなさい。寝床を担いで、家に帰りなさい」となっています。罪の赦しが先で、起きて歩けはその後。そのような順番になっている。

ここで考えます。中風の人はどうして立ち上がり、寝床をたたんで歩き出したのか。もちろん、イエスが「起きなさい。寝床を担いで、家に帰りなさい」と語ったから。そう思います。罪を赦すことと、立つて歩き出すことは別のことのように見えたかもしれませんが。別のことであるなら順番は関係ありません。どちらが先であろうとも同じことになる。しかし、イエスにとってこの順番しかなかった。逆の順序はあり得ません。

なぜなら、中風の人が立ち上がって歩き出したのは、罪が赦された結果だから。別の言い方をすれば、罪の赦しがない限り、中風の人には立ち上がることはありません。この後も、イエスは様々な人の目を開き、口がきけるようにしたり、死人さえもよみがえらせていく。そこにはいちいち罪の赦しの宣言は書いていないかもしれない。でも、すべてのいやしには罪の赦しが先立っていること。罪の赦しの結果として身体のいやしがあることをいつも思いだしてください。

パリサイ人たちは、神だけしか罪を赦すことができないと言って非難しました。ある意味正しかったのですが、最も肝心なこと、目の前におられる方こそが、神であることを認めることができず、間違ってしまった。やがてイエスを十字架に追いやることになるのです。

3 信仰

1) 手を汚そうとしないパリサイ人たち

最後に、わきに置いてきた疑問に触れておきます。20節の「彼らの信仰を見て」とは何か。パリサイ人たちの信仰と比べてみるとはっきり見えてきます。

パリサイ人たちはなにをしたのでしょうか。いま見たとおりじっと座って、イエスのあら探しをしています。相手のダメなことばかりをほじくり出して、文句を言う。自分の手で積極的に何かをしようとしなさい。中風の人が目の前に横たわっていても、何もしようとしなさい。自分の手を汚そうとせず、安全なところにあります。なんだか身につまされる話ですが、それが彼らの信仰でした。

2) 中風の人を連れて来た男たち

それに対して、中風の人を連れてきた人たちはどうか。彼らは、屋根を壊して、大勢の人たちの真ん中にベッドをつり降ろしました。そうしたらどうなったと思いますか。当然、家の中にいた人たちは天井を見上げながら騒然となったでしょう。

「何をするのか」と怒号が飛び交ったはずですが。連れて来た男たちはもとから無礼で、非常識な人たちだったので何も感じなかったのか。そんなはずはない。とてもつらかったはずですが。でも、自分の家族、仲間であるこの中風の人をなんとか助けたい、その思いで、人々から非難されても我慢をして、イエスの前に連れて来ようと思いました。

3) 罪を背負われる神

イエスをご覧になっているのはそこではないでしょうか。そしてよく見るとイエスご自身も同じことを経験しています。イエスが、パリサイ人、律法学者たちにどのように立ち向かったか、よく見てください。

私は、この箇所をじゃんけんというゲームにたとえるとわかりやすいと思っています。じゃんけんは手を同時に出すのが決まりで、相手よりも先に出したら絶対に負ける。ところが、イエスのじゃんけんは、完全な先出しじゃんけんなのです。「あなたの罪は赦された。」それが先出しです。それを見ていたパリサイ人はイエスが出した手を見て、「そうら尻尾をつかんだ。お前は神をけがしているのだ」と非難しました。イエスが先出したからです。これはなんのエネルギーもいらない。実に簡単にできてしまう。どうして先出しするのか。わざとそうやって、相手から非難されるような隙を与え、非難されていく。こうしてイエスも、中風の人を連れて来た男たちと一緒に立場に立たれます。

皆さんはこれまで、神はどんな方だと想像していたでしょう。どこか高い所に立って冷たい視線で見おろしているのではありません。ご機嫌をそこねたらわざわざいをもたらず気まぐれの神でもありません。私たちといっしょにつらい思いをしてくださる。人々から怒りの声を浴びせられ、手と足に釘を打たれ、茨の冠をかぶせられて血を流し、いのお捨てになられた。この方が、私たちの主であることを覚えたいと願います。